

日本語の再発見

“工”といふ漢字

“仮借”が文字通り「仮の借物」であることは十分に説明できてゐるやうに思ふけれども、念のため、もう一つもっとはっきりした例を紹介したい。

“工”といふ漢字である。この字は、“定規”の形を表した字で、“物差し”が本義の字である。今は実際には「物差しを使って“物を作ること”(工作)」や「物差しを使って“物を作る人”(大工)」といふ意味に使はれてゐる。

今は「物をうまく作ること」を“巧”、「物を作り上げること」を“功”、「物を一心に作ること」を“攻”といふ字で表してゐるけれども、これらの字の発音は皆“工”と同じであるがら、同じ言葉であつたことが判る。

従つて、今の“巧”“功”“攻”といふ字は、昔は無くて、“工”で書き表してゐたはずである。ところが、同じ「物を作る」といふ言葉であつても、「どのやうに作るか」によつて、「うまく作る」のは“巧”、「一心に作る」のは“攻”「立派に作り上げる」のは“功”といふやうに、別の文

字を作つてこれを表現したといふことは、「思想(意味)が本体で、発音は容器」であることを証明したものであつて、「文字はただ発音さへ表せばそれで良い」といふ西欧の学者の意見がいかに低級なものである

か、よく理解できるであらう。

言葉は音声によつて意思を伝達するものであるが、音声は手段であつて、目的は意思の伝達に在る。だから、言葉を視覚化した文字も、表音は手段であつて、目的は意思の伝達に在ることは当然である。

だから、本当の文字は、“巧”“功”“攻”のやうに、言葉としては“工”の一字で十分に表現できてゐるのに、言葉では表現できない所まで表現することに努めるものなのである。“表音”は最低の条件であつて、それより高い所を求めてゐるのである。

この事実を見たら、「表音化が文字の進歩なのである」といふ西欧の学者たちの主張がいかに間違つて居り、欺瞞に満ちたものであるか、よく解つて頂けると思ふ。